

〔教育実践報告〕

「女性学ゼミ」の実験

小 森 治 夫

はじめに

Ⅰ. 「女性学ゼミ」の活動内容

Ⅱ. なぜ「女性学ゼミ」を始めたのか

Ⅲ. 「女性学ゼミ」の実験

Ⅳ. 学生による「女性学ゼミ」の評価

おわりに

はじめに

私が鹿児島県立短期大学に赴任して3年がたとうとしている。一般の公務員としての職業生活を20年間してきた私にとって、教育という新しい仕事は、なかなか“刺激的”なものがあつた。とくに1年目は講義の準備に追われ、まさに「自転車操業」の日々であつた。「日本経済論」はともかく、専門外の「農業経済論」「協同組合論」を担当したため、本当に四苦八苦であつた。

ところで、講義とならぶ教育の柱は、ゼミナールである。とくに、商経学科では、ゼミナールと卒業論文の作成を重視している。

この小論で報告したいことは、「女性学」をテーマにとりあげた、私のここ2～3年間のゼミナール活動の実験についてである。

なお、「女性学」とは、1960年代に高揚した第二波フェミニズムの流れの中で、1970年代にアメリカの大学で開講された“Women's Studies”のことであり、日本でも1970年代末以降、「女性学」に関する研究が活発化している。「女性学」を一言でいえば、従来は男性中心の視点から行われてきた学問体系

全体を、女性の視点から見直していこうという壮大な運動である。

I. 「女性学ゼミ」の活動内容

まず、商経学科の教育体系の中で、ゼミナールと卒業論文がどのように位置づけられているかについて、説明しておきたい。

第一部の1年生には、前期にまず「基礎演習」がある。ここでは、大学における学問と研究の方法、すなわち、ゼミ活動の中心をなすレジュメのまとめ方と報告の仕方、ゼミ討論の組織の仕方、そして個人研究テーマの選び方、文献検索の方法、論文の書き方などを、コンピュータの活用方法を含めて学ぶ。また、「基礎演習」には、友だちづくりの基礎単位としての意味をももたせようとしている。

後期からは、本格的なゼミナール活動である「演習Ⅰ」が始まる。各教員はゼミナールのテーマを掲げて、ゼミ生を募集する。学生は、各専攻の教員4～5名の中から、自分の学びたいテーマのゼミナールを選択するわけである。このゼミは「卒業研究」まで一貫している。

2年生の前期には、「演習Ⅰ」に引き続いて「演習Ⅱ」がある。そして、後期からはいよいよ「卒業研究」となり、ここで各人の卒業論文をまとめることとなる。

次に、私が「女性学ゼミ」でとりあげた文献について、紹介しておきたい。

1995年度の1年生の「演習Ⅰ」では、最初はテーマを幅広く、「アジアと環境」としていた。しかし、第一部では女性が圧倒的に多いことから、女性の視点が活かされた文献として、松井やより『女たちのアジア』（岩波書店）と宿谷京子『アジアから来た花嫁』（明石書店）をとりあげたが、とりわけ前者は私の想像以上に好評であった。

そこで、1996年度の2年生の「演習Ⅱ」では、「女性学」を正面から打ち出して、中田照子／杉本貴代栄／J. L. サンボンマツ／N. S. オズボーン『学んでみたい女性学』（ミネルヴァ書房）、加藤秀一・坂本佳鶴恵・瀬地山角編『フェミニズム・コレクションⅠ』（勁草書房）をとりあげた。そして、「卒業研究」

では、伊藤公雄『男性学入門』（作品社）をとりあげた。

また、同じ1996年度後期からの1年生の「演習Ⅰ」の募集においても、「女性学」を正面から打ち出した。この「演習Ⅰ」では、井上輝子『女性学への招待』（有斐閣）、『男性学入門』、『フェミニズム・コレクションⅠ』をとりあげた。

1997年度においては、私は4月から9月まで京都大学へ内地留学することとなり、2年生の「演習Ⅱ」の指導は西村貢教授にお願いすることとなったが、文献の選択は私が行った。前年度からの続きとして『フェミニズム・コレクションⅡ』をとりあげるとともに、1995年度において評判のよかった『女たちのアジア』およびその続編である松井やより『女たちがつくるアジア』（岩波書店）をとりあげた。また、「卒業研究」においては、山田昌弘『結婚の社会学』（丸善）をとりあげた。

以上が、私が「女性学ゼミ」においてとりあげた文献である。

なお、「女性学ゼミ」への応募状況についても簡単に記しておこう。1995年度は経済専攻38名のうち10名の応募、1996年度は41名のうち14名の応募、1997年度は（私が内地留学でいない間の募集であったためでもあろうが）42名のうち19名の応募があった。「女性学」という分野が、学生の関心をよんでいることが確信できる数字であろう。

Ⅱ. なぜ「女性学ゼミ」を始めたのか

ここでは、私がなぜ「女性学ゼミ」を始めたのかについて、簡単に説明しておきたい。

当然のことだが、わたしは「女性学」の専門家ではない。まったく関心がなかったわけではないが、系統的には研究したことはない、いわば素人である。

既に述べたように、1995年度においては、最初は「アジアと環境」という幅広いテーマを掲げていた。しかし、第一部は女性が圧倒的に多いことから、女性の視点が活かされた文献として、『女たちのアジア』とレイチェル・カーソン『沈黙の春』（新潮社）を当初は予定していた。しかし、ゼミを進める中

で、学生の「女性学」への関心の強さに驚き、予定を変更して『アジアから来た花嫁』をとりあげるとともに、私自身も「女性学」の入門書を本格的に読み始めた。そして、1996年度からは「女性学ゼミ」への応募状況からみても、学生は「女性学」に強い関心をもっているという確信を抱くに至り、「女性学」の入門書を中心にとりあげだした、というのが本当のところである。

また、鹿児島県の地域性とのかかわりの問題であるが、鹿児島には関西と比べて「男尊女卑」の遺風が強く残っていると感じたことも、「女性学」をとりあげた動機の一つである。この風土の中で、女性がたくましく生きていく支えに、「女性学」がなりうるのではないかと思ったからである（学生は、学校社会の中ではほとんど差別された体験はないが、アルバイト先で男女差別やセクハラ被害にあっているようである）。

そして、短大卒業後には「男性中心の企業社会」に巣立っていくわけであるから、卒業後の進路の選択、さらにはその後の人生の設計についても、正しい情報を与えることが短大における教育にとって決定的に重要である。そのためには、短大における教育にジェンダーの視点がきわめて重要となる。女性としてどう生きるか、すなわち、就職、恋愛、結婚、出産、子育てという女性のライフ・サイクルの中で、どのような選択をするべきなのか（結婚する or しない、出産する or しないを含めて）を学ぶことである。あるいは、それは女性が働き続けることの意味を問うことであり、経済的自立と精神的自立と生活の自立とをなしとげる道を探ることでもある。このようなジェンダーの視点が欠落した短大教育では、今の学生の問題関心や勉学意欲に十分応えることができない、と言えるのではないだろうか。

さらに、たまたま1995年度ゼミ生の特殊性かもしれないが、両親の夫婦関係を批判的にみている学生が多かったためか、ゼミの時間に結婚に対する意識を聞いたところ、「結婚したくない」という回答が10名のうち8名の学生からあったことが鮮明に記憶に残っている。それは、18～19歳の女性ならば、「結婚にあこがれているはずだ！」と私が思い込んでいたからであるが、かなりショックなものがあったことは確かである。

(男女の生物的性差を Sex, 男女の社会的・文化的差を Gender という。)

Ⅲ. 「女性学ゼミ」の実験

このように、学生が強い関心をもっている「女性学」を取りあげたゼミナールではあるが、必ずしも毎回活発な議論が展開されたわけではない。「お通夜ゼミ」とまでは言わないが、主な発言者は2～3名に片寄っていたことも否めない。一応は、まじめに「女性学」を学習したと評価できると思うが、たまにはエキサイトな論争も経験した。

私の記憶に強く残っているのは、「女性の生き方」について議論した時のことである。あるゼミの時に、ゲストで招いた専業主婦経験のある女性が、「結婚は是非すべきだ！子育ては楽しい！専業主婦こそ女性の生きる道だ！」と意図的に誇張した発言をしたところ、学生が一斉に反発し、ふだんは聞き役に回っていた学生までもがエキサイトして次々と発言し、大いにゼミが盛り上がったことがある。そして、その次の週には、「専業主婦礼讃(?)」に反発した学生が、「女性は働き続けるべきである」という主張をもつ女性をゲストに招き、自主的に討論を組織した。

このようなゼミナール活動の成果か、1995年度のテーマは「アジアと環境」であったにもかかわらず、最初の卒業生10名のうち5名が「女性学」に関するテーマの卒業論文を提出した。具体的には、「男女共生社会に向けて」「日本女性の歴史」「シングルについて」「働く女性、仕事と家庭の両立は可能か」「『従軍慰安婦』問題を考える」である。

1996年度からはゼミナールのテーマを「女性学」としたことから、卒業論文のテーマは「女性学」に関するものが圧倒的に多くなった。具体的には、「性差と性役割」「均等法時代の女性」「女性労働」「セクシャル・ハラスメントについて」「シングルウーマンについて」「主婦について」「アジアの女性」「高齢化社会について」、そして「男性学について」であった。

また、「女性学」はその誕生のときから、学習・研究と実践との関係が強い学問である。「女性学」で学んだことは、やはり実践されなければ意味がない。

しかし、現実には「男性中心の企業社会」であり、その中で女性が働き続けることには幾多の困難がつきまとう。志高く就職したものの、挫折感から、結婚や専業主婦へ逃避するということにもなりかねない。

つまり、「女性学」は、短大での教育だけで事足れりとはいかず、その実践性の強さは、卒業・就職後のフォローまでをも要求するのである。

IV. 学生による「女性学ゼミ」の評価

学生が「女性学ゼミ」をどのように評価しているかは、私にとって気になるだけでなく、上に述べた「女性学」の実践性からすれば、今後の彼女たちの人生において、「女性学」で学んだことをどう活かしていくかの、最初のリトマス試験紙である。

そこで、授業評価にならって、1997年3月の卒業生（第一期生）と1998年3月の卒業予定者（第二期生）とを対象に、簡単なアンケート調査を実施した。

アンケート項目は二つである。一つは、「あなたは『女性学』を学んでよかったですか？」という問いに対して、「よかった、よくなかった、どちらともいえない」から回答を選択した上で、「具体的にどういう点がよかった（よくなかった）ですか？」と問うものである。

もう一つは、既に社会人となった卒業生には、「社会に出てから『女性学』を学んでいたことが役に立ちましたか？」という問いに対して、「役に立った、役には立たなかった、どちらともいえない」から回答を選択した上で、「具体的にどういう点が役に立ちました（役に立ちませんでした）か？」と問うものである。

他方、卒業予定者には、「社会に出てから『女性学』を学んでいたことが役に立つと思いますか？」という問いに対して、「役に立つと思う、役に立たないと思う、どちらともいえない」から回答を選択した上で、「具体的にどういう点が役に立つ（役に立たない）と思いますか？」と問うものである。

サンプル数が少ないため、正確な評価とは言えないが、まず、「『女性学』を学んでよかったか？」の問いに対しては、全員が「よかった」と回答している。

具体的なよかった点については、まず社会人の回答を紹介する。

「女性が生きていく上で、現在、社会の中でどれだけ男性と差別され、平等に扱われていない現実が、本などを通じてわかった（今までは、差別されてるとか、考えながら生きてこなかったから）。

その現実に関向かう女性たちがいること、逆にその現実に甘んじてる女性もいること（仕事を腰かけでしてる人、結婚を逃げ場にしてる人）がわかった。

いろんな生き方があること。『女の幸せは結婚だ』なんて言われ、女性は結婚することが当然だと思われていたが、結婚をしない女性もいるし、未婚で子供をもつ人もいる。いろんな生き方があるんだとわかった。

宗教による女性差別があることを知った。

女性を差別する社会でもあるが、女性の性を商品化し、商売にしてしまう社会でもあることがわかった。

男女平等を願う女性たちの足を引っぱるのは、男性ではなく、同じ女性である現実があること。

自分が（女として）どんな生き方をしたいのか、少しでも考えられたこと。

女だから、男だからとかいう発想をなくせたとすること。」

「女性の生き方について、いろんな考えがあることを知り、自分の生き方を見直すことができた。

一番影響されたのは、女性は少し働き結婚するのが普通であり、自分もそうなるのが当然であると本能的に思い込まされていたことを、そうではない違ったいろんな道があることを知ったことだと思う。」

「女性も社会に出て働くにしろ、家事に従事するにしろ、自立をすることが大切ということがわかった。」

「日本の女性の職場での待遇・賃金等で、他の国々（とくに東南アジアの国々）と比較して、男女差別が少ないことが学べた。

法律の中には女性を甘やかしているもの（例：夜10時以降は特定の業種

以外労働させてはならない……等)があることに気づかされた。」

次に、卒業予定者の回答を紹介しよう。

「私たち女性が生きていく上で、女性学は知っておくべき課題ではないかと思う。ゼミで学ぶ以前は興味があるという程度だったけど、ゼミを通して女性の生き方とか社会における女性のあり方などについて考えることができたと思う。」

「女性学についていろいろなことを学んで役に立つことが多かったです。その中でも、働くことや結婚についてなど、学べてよかったです。」

「結婚や役割分担、男らしさや女らしさなど、女性学を学んで今までの自分の考え方が少しでも変わったこと。」

「親と語れるようになった(父親が家事をするようになった!!)。

“こんな女性になる”という方向性が見えてきたかもしれません。」

「女性がどういう面で、どんな悩みが生じているのかははっきりしたし、女性が生活する環境がよくなってきつつあるとはいえ、まだまだ問題があることが明らかになって、自分の生き方を考える上でもよい参考になった。」

「女性学は、自分にとってとても身近な問題なので、それを少しでも学べたからよかった。」

「いつも気づいていたようで気づいていなかった、女性の身近な問題を学ぶことができてよかった。」

「具体的に考えてみる機会はなかったので、みんなで勉強することができてよかった。」

「本をたくさん読んだので、いろいろな考え方を知ったこと。」

第二に、「社会に出て『女性学』は役に立ったか？」という問いに対して、社会人は「どちらともいえない」あるいは「わからない」と回答している。

そして、「具体的に」という問いに対しては、次のように回答している。

「社会が女性に対する姿勢という現状を知っていたため、仕事をしだしてから自分が受けた現状にショックはあまり受けず、『どうしてこうなるのか?』と考えられた。しかし、それらの現状に腹が立ったのもなきにしもあらず……。」

「女性学を学んで、自分の考え方、生き方の参考にはなったと思うが、社会に出て役に立っているかどうかはわからない。

会社に入ってからわかったことは、世の中の男は結婚するのがあたり前、女は料理をするのがあたり前などと思っている人が多いこと。」

「学生の頃は、社会に出て働くことの大変さを知らずに、いろいろ討論していたような気がする（実際、社会に出て働いてみて、考えが変わった?）」

「職場で働いていて、女性だからお茶をくんでださないといけないというような差別もなく、女性は産前・産後休暇もとやすい職場のため、特に不満に思うこともないし、女性学で学んだことが役に立っているか、役に立っていないかどうか、あまりよくわからない。」（注. 彼女は地方公務員）

これに対して、卒業予定者は、「社会に出て『女性学』は役に立つと思うか?」という問いに対して、意気高く「役に立つと思う」と回答している。

「自分が社会に出た時に、はっきりした意見をもつためにも、役に立つと思う。」

「社会に出ると女性の職場に対する厳しさを知ると思うけど、その時自分の考えとして女性学で学んだことをだしていければ、それでいいのではないかと思った。」

「これから社会に出て生きていく上で、いろいろなことがあると思うけど、そんなとき役に立つと思います。そして、ゼミで学んだことを生かしていきたいと思います。」

「社会に出たら、性差別とか性役割などは重要な問題なので、自分が、実際、その問題に直面した時に役に立つと思う。」

「男だから、女だからという偏見をもたなくなったので、社会に出てから

男女平等の意識をもって行動できるのが役立つと思う。」

「家事や育児などの点について、少しでも生かしていけると思う。」

「結婚、育児、家事など、自分が実際に直面したとき。」

「あまり言い過ぎもよくないけれど、職場が女性中心なので、言いたいことを言うことができるような気がする。」

このような卒業時の高き志が、社会の中で色あせていくのではなく、厳しい現実の渦中にあっても、しなやかにかつしたたかに、「女性学」で学んだことを実践していったほしいと思う。

おわりに

「女性学」は「禁断の木の実」ではないか。

18歳まで家庭で学校で刷込まれた、「女らしさ」「女性はかくあるべし」「女性はかく生きるべし」を破壊し、「男性中心の企業社会」「男女差別社会」の現実をかいま見せながら、それをしなやかにかつしたたかに変革していく道筋と方法を示唆する。

さしずめ私は、「イヴ」をそそのかして「禁断の木の実」を食べさせる、「蛇」という役回りであろうか。

しかし、今の日本社会では、刷込まれた「女らしさ」の命ずるままに、「幸せな専業主婦(?)」の一生をまっとうすることはもはや不可能である。バブル経済が崩壊し不況の真っ直中にある日本社会は、そのような女性の生き方を許さない。「不老不死の親」か「社会的に頑健なカレシ」というパトロンをもつことは、実際にはありえないことである。

シングルでいるにせよ、結婚するにせよ、自分の生活費は自分で稼ぐ、これがこれからの女性の自立した生き方である。経済的自立を前提としてはじめて、精神的自立と生活的自立が成り立ちうるのである。